

算数 第1学年 おぼえているかな？

授業の設計図

元にした物：小学校学習指導要領（平成29年告示）の原文と、国立教育政策研究所の学習評価の参考資料。教科書の本文・問題・挿絵は入れていません（先生が入れる欄）。東京書籍「新編 新しい算数」令和6年度版の公表年間計画に対応。時期：9月中旬。教科書固有の問題文・図版は転載していない。復習の具体課題は本案の提案である。教科書掲載問題の内容を確認・転載したものではない。

この単元で子どもが最後にできるようになること

到達点は「十のまとまりと端数を使って数を確認める」ことである。児童が「十と残りの個数を合わせると全体の数を表せる」という根拠を、自分の操作や記録に結び付けて説明できる状態を目指す。本時の課題「自分のノートの数具体物を作り、十のまとまりと残りを示す」は、予想と確認結果の違いを扱い、方法を選ぶ理由を話し合うために置く。教師は解決の速さだけで進度を判断せず、説明の中で何を根拠にしたかを確認める。

学習指導要領のどこに書いてあるか（原文）

学習指導要領の項目	原文
〔第1学年〕の目標(1)	(1) 数の概念とその表し方及び計算の意味を理解し、量、図形及び数量の関係についての理解の基礎となる経験を重ね、数量や図形についての感覚を豊かにするとともに、加法及び減法の計算をしたり、形を構成したり、身の回りにある量の大きさを比べたり、簡単な絵や図などに表したりすることなどについての技能を身に付けるようにする。
〔第1学年〕の目標(2)	(2) ものの数に着目し、具体物や図などを用いて数の数え方や計算の仕方考える力、ものの形に着目して特徴を捉えたり、具体的な操作を通して形の構成について考えたりする力、身の回りにあるものの特徴を量に着目して捉え、量の大きさの比べ方を考える力、データの個数に着目して身の回りの事象の特徴を捉える力などを養う。
〔第1学年〕の目標(3)	(3) 数量や図形に親しみ、算数で学んだことのよさや楽しさを感じながら学ぶ態度を養う。

単元の目標

十と残りの個数を合わせると全体の数を表せることを理解する。十のまとまりと端数を使って数を確認ることができる。解決の根拠を確認め、他の方法との比較を通して自分の説明を見直そうとする。

評価規準（3観点）

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①十と残りの個数を合わせると全体の数を表せることを理解し、課題に応じた操作や表現を用いている。	①「十と残りの個数を合わせると全体の数を表せる」を、用いた具体物・図・表・式のうち課題に必要な表現と対応させて説明している。	①自分の方法を確認め、交流で得た見方を使って説明や解決方法を修正しようとしている。

単元の流れ

公式資料の配当時数欄は「－」。独立した授業時数は加算せず、既習単元内で行う復習活動を提案する。

次	時	学習活動	評価規準（評価方法）
復習	既習単元内で調整（復習活動案）	○関連する既習の記録を確かめる。 ○操作と根拠を照合する。 ○説明や手順を修正する。 ○本時の中心課題：自分のノートの数具体物で作り、十のまとまりと残りを示す。	思①（説明と確かめ方）



本時の案

本時の目標：十のまとまりと端数を使って数を確認することができる。

段階	学習活動（○主な発問） ・予想される児童の反応	指導上の留意点（◎評価）
導入 （ 分）	○自分のノートの数を具体物で作し、十のまとまりと残りを示す。 ○「まず何をそろえたり、何に注目したりすると確かめられそうですか」 ○予想を言葉や具体物の操作で示し、教師が必要な箇所を記録する。 【めあて】十のまとまりと端数を使って数を確認める。 〈予想される児童の反応〉 ・十の束を一本と数えて全体の個数を間違えると思う。 ・見た目や答えだけで決めず、確かめる方法が必要だ。	・提示する具体物や資料は授業前に教師が確認する。実測を伴う課題では測定結果を事前に決めつけない。 ・予想の違いを残し、正しい考えだけを先に紹介しない。 ・教科書を用いる場合は自校の掲載箇所を確認し、この資料へ固有の問題文を転記しない。
展開 （ 分）	○自分のノートの数を具体物で作し、十のまとまりと残りを示す。 ○一人で確かめた方法を記録し、根拠となる箇所を示す。 ○「『十の束を一本と数えて全体の個数を間違える』という考えは、どこを確認めると判断できますか」 ○「確かめる前と後で、説明のどこが変わりましたか」 ○友達の説明と自分の記録を照合し、違いがある箇所は操作や資料に戻って確かめる。 〈予想される児童の反応〉 ・十と残りの個数を合わせると全体の数を表せる。 ・最初の説明と操作の結果を比べ、修正する箇所を確認している。	・予想する誤りは「十の束を一本と数えて全体の個数を間違える」である。 ・支援として、十の束をほどき、ばらの十個と対応させる。 ・支援後は別の例でも本人が説明できるか確かめ、教師の言葉を復唱しただけで理解と判定しない。 ・説明が進んだ児童には、条件を変えても同じ方法が使えるかを問い、使える範囲を考えさせる。 ◎思① 「十と残りの個数を合わせると全体の数を表せる」を、用いた具体物・図・表・式のうち課題に必要な表現と対応させて説明している。（発言・操作の説明・ノート）
まとめ （ 分）	○初めの予想に戻り、確かめた根拠を付けて説明し直す。 【まとめ】十と残りの個数を合わせると全体の数を表せる。 ○次に同じ方法を使えそうな場面、またはまだ確かめたいことを記す。 〈予想される児童の反応〉 ・「十の束を一本と数えて全体の個数を間違える」と考えたが、確かめると違いが分かった。 ・何を根拠にしたかを示すと、説明が伝わりやすくなった。	・まとめの文の書き写しだけで終わらせず、自分が使った根拠を添えさせる。 ・口頭、指さし、操作の記録も使い、書く速さと理解を混同しない。 ・態度は単元を通した説明や方法の修正から捉え、挙手の多さでは判定しない。 ◎態①（予想と修正後の記録の比較）

板書の構造

上段：めあて「十のまとまりと端数を使って数を確認める」。

左：課題「自分のノートの数を具体物で作り、十のまとまりと残りを示す」と児童の予想。
中央：実際に確かめた操作や図・表・式を、必要なものに絞って配置する。根拠となる箇所を印で示す。
右：「十の束を一本と数えて全体の個数を間違える」という考えと、確かめた結果を並べる。
下段：まとめ「十と残りの個数を合わせると全体の数を表せる」。初めの説明から変わった点を記す。

つまづきやすい所と手当て

予想する誤りは「十の束を一本と数えて全体の個数を間違える」である。用語の理解、数量や図形の対応、操作の手順のどこで困っているかを観察する。具体的な支援は「十の束をほどこき、ばらの十個と対応させる」こと。支援後に本人が説明できるかを確かめる。書くことが難しい児童には操作や指さしを使い、理解が進んだ児童には条件を変えた場合の成立を考えさせる。交流の後には必ず個人の説明へ戻り、考えがどう変わったかを記録する。

プリントの案

根拠を確かめる記録

課題「自分のノートの数を具体物で作り、十のまとまりと残りを示す」、初めの予想、確かめた方法、根拠の箇所、説明し直した文の欄を設ける。課題に必要な図や表を児童が書き込める余白を取る。

説明を見直す記録

初めの説明、友達の方法と比べて気付いたこと、修正後の説明を並べる。教科書の問題や図版を複製せず、児童自身の記録を使う。

出典：小学校学習指導要領（平成29年告示）算数（https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1384661.htm）／東京書籍 年間指導計画作成資料（公式単元・時期・配当）（https://ten.tokyo-shoseki.co.jp/text/shou/sansu/data/sansu_keikaku_saian_1_20240131.docx）／国立教育政策研究所 学習評価に関する参考資料 小学校算数（https://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/hyouka/r020326_pri_sansu.pdf）
AIが作成した授業案です。授業での検証は未実施です。自校の教材・年間計画・学級の実態に合わせて確認してください。



Threads「三重でAI使うなら」(@mie_ai_katsuyo)
https://www.threads.com/@mie_ai_katsuyo

LINEオープンチャット
みえ先生ラボ

